



小品集付録



堰川志真



目次

「裸体」執筆時のメモ	1
初期断片集	3
あとがき	4
「裸体」執筆時のメモ	

$$\frac{\text{IMG}}{\text{G}} \Big|_{\frac{5}{8}} \Big/ \left(\frac{1}{j} \right) \cdot j_{\text{pg}}$$
[illegible][illegible]

初期断片集

まるで、生に取り憑かれているようだった。
生の目を探して渡っているのだ。

隣のこの人間は。それをやっと知った。

まるで熱狂。皆取り憑かれていると思った。私だけが正常のように思われた。

―血肉とコンクリート

あの人に憧れていたから

あの人の様に振る舞っていた。

置き去りにされたパラノイアックが被害に遭っていた。

外も内も侵された。

目だけが生きていた。

―分離あるいは理想

十年前の旋律の中の旋回を見つけて

私たちは十年前と全く同じく踊った。

―同じ踊り

虚は、包容や、慈しみや、人間を着て、それに為っていた。

―為る

ただ君を待ち通す日々。君が去れば私はまた未分化に戻る。

―私の日々

あとがき

この小品集は、2019年〜2023年の間に書いたものの中で、自分にとって意味の強いものを編集したものです。書いていたときは、どうしてもこれを自分の体（皮膚）の外側に出さねばという切実さで必死でした。とくに「均衡」と「裸体」は自分にとって必ず書き上げなくてはならないものでした。三年間くらい寝かせたり起こしたりをくり返して、ようやくここで完成となり、やっと終わらせることができましたとほっとしました。

自分のために書いたものではありませんが、読んで下さった方といいタイミングで交感できたらないです。

最後まで読んで下さってありがとうございました。

堰川志真

小品集付録

著 者 堰川志真

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
